

## 令和元年度試験研究課題の外部専門家との意見交換について

### 1 開催概要

- (1) 開催日 令和元年7月29日(月)
- (2) 場所 水産会館6階会議室
- (3) 外部専門家 (公財)海洋生物環境研究所 日野 明德 顧問  
 (大)東京海洋大学 田中 栄次 教授  
 (研)水産研究・教育機構中央水産研究所 銭谷 弘 業務推進部長

### 2 検討課題と主な質疑・意見

#### (1) 藻場消失に係る実態把握と原因の推定及び回復対策手法の検証(事前検討)

質疑	応答
<p>大変面白いテーマであり、藻場がなくなる前の対策は大事である。城ヶ島のようになくなってからでは遅い。岩井・富浦地先では沖から藻場がなくなっているのか。</p> <p>東京都ではドローンを使用し、テングサの調査を行っているが、種の特定まではできていないようだ。アラメ・カジメの区別はできそうか。</p> <p>今日本中で魚による藻場への被害が報告されている。特に南洋系の魚が多いようだが、千葉県で普段見ないような魚の報告は来ているのか。</p> <p>着水できる防水性のドローンもあるが、その使用は考えているのか。</p> <p>これだけの内容を担当者一人で実施するにはボリューム的に難しいのではないか。</p>	<p>そのようだ。沿岸は波などの影響で原因生物であるガンガゼ等がつかなかったのではないかと考えている。</p> <p>区別までは難しいと思う。</p> <p>昔から確認されているブダイやアイゴの報告はあるが、普段見ないような南洋系の魚の目撃例はない。南洋系の魚は漁獲対象種ではないため、量的な把握も難しいと思う。聞き取りを遊漁や近隣のダイビングショップに拡大して、確認してみたいと思う。</p> <p>基本的には市販されている通常のドローンを使用する予定。</p> <p>潜水作業があれば、2人体制で実施しなければならないが、今回は船上から水中カメラで撮影する方法とドローンで空撮する方法をとり、どちらも一人でできるので、可能であると考えている。</p>

( 2 ) 遡上性に優れたアユ放流種苗の作出 ( 中間検討 )

質疑	応答
<p>今回の課題の要望は、遊漁者から あったのか。</p> <p>支流などが無い河川だと雨で増水して、そこに生息しているアユが流されてしまう場合もあると思うが、遡上性を高める理由は何か。</p> <p>戻し交配後の継代 3~4 年目に期待とあるが、それ以降の継代になると特性はなくなってしまうのか。</p>	<p>遊漁者に加え組合からも要望があった。おとりを追わずに友釣りができない ようだ。</p> <p>放流直後にすぐ下流に行ってしまうので、それに対する対策である。</p> <p>その可能性はある。なので、2 系統を 作出し、ローテーションして対応したいと考えている。</p>

( 3 ) 貧酸素水塊の影響を軽減する漁場再生手法の策定に必要な環境条件の決定 ( 事後検討 )

質疑	応答
<p>トリガイの「貧酸素化海域と重なる北部漁場は一代採捕場と考える」という考え方は面白い。こういう結果が出ないと言えないことなので大事だと思う。浮遊幼生の移動解析では潮汐を考慮しているのか。</p> <p>トリガイ稚貝の輸送について、10 年ほど前に東京湾のアサリの種場に関する研究が行われているので、その成果も活用できると思う。</p> <p>ホンビノスは底質が泥質のところには生息しているので、底質を改善してしまうといなくなってしまうのではないか。</p> <p>アサリを含む、二枚貝全般の多様性について色々考えてみるとまた面白くなると思う。</p>	<p>浮遊幼生は表層に浮き上がってくるので、解析では風を考慮している。</p> <p>ぜひ検討したい。</p> <p>あまり考えたことがないのでなんとも言えないが、餌の摂取方法が貝によって異なる (トリガイを例にすると浮遊しているものと底に付着しているものを 摂餌) ので、底質が変わったからと 言ってすぐいなくなることはないの ではないか。</p>